

今回は社会人野球のお話です。

毎日新聞社は長年、その振興に力を入れていきます。県内ではマツゲン箕島(有田市)が9月2日から3日間、新潟県内で開かれる全日本クラブ野球選手権大会に出場します。優勝すれば社会人野球日本選手権(11月)に出場できるだけに、1年で最も力を入れる大会です。

マツゲン箕島はNPO法人が運営し、企業チームではありません



練習試合に出場し、一塁でリードを取る高橋直政選手(中央)。チーム最年長でコーチも兼任し、若手を引っ張る有田市宮崎町のマツゲン有田球場で

が、スーパーマーケットを展開する「松源」(和歌山市)がさまざまな支援をしています。選手たちには仕事場が確保され、松源の各店舗などで基本的に午前7時から午後1時まで働き、午後から練習します。他にも、交通費の補助や賛助会員としての資金提供なども受けています。

また、チームは野球教室のほか、津波避難路や保育園での清掃を引き受けるなど、地元との関係を大切にしてきました。資金繰りは厳しいですが、ふるさと納税を活用。地域密着で選手の生活と練習環境の確保を両立した手法は、地方でのスポーツ組織運営のモデルと言えます。

現在の最大の課題は、勝てるチーム作りです。これまでもちろん取り組んできましたが、なぜ今、改めて勝利が必要なのか。西川忠宏監督(62)は「我々は遊びで野球をやっている訳ではない。皆さんに応援してもらっている以上、勝たないと本気度が伝わらない。職場の同僚が、地元の掃除を

してくれた若者が、試合で活躍すれば職場も地域も盛り上がる。だから選手たちには『仕事も人一倍、野球も人一倍やりなさい』と常に言っています」と語ります。

マツゲン箕島が勝ちにこだわる理由

チームは今、試練の時を迎えています。最年長でコーチ兼任の高橋直政選手(26)は「関西高、大阪体育大出身」は「当たり前前のことを当たり前でできるのが強いチーム。そこが企業との差です」と受け止めます。自身はセンターでスタメン出場し

チームは今、試練の時を迎えています。最年長でコーチ兼任の高橋直政選手(26)は「関西高、大阪体育大出身」は「当たり前前のことを当たり前でできるのが強いチーム。そこが企業との差です」と受け止めます。自身はセンターでスタメン出場し

続けており「若いチームなので、勢いもあるが飲まれることもある。みんながのびのびとプレーできるようにしたい」と言います。藤田幸永主将(24)は「福知山成美高、追手門学院大出身」はクラブ選手権への道が断られた昨年の西近畿予選が忘れられません。相手はNOMOクラブ(兵庫)。当時副主将だった藤田主将は劣勢に意気消沈する姿に納得できず、試合後「全員で勝つことへの意識が重要だ」と訴えたそうです。そして今年の同予選決勝。兵庫県警桃太郎(兵庫)を相手に八回を終えて7対10でしたが、下を向く者はおらず、気持ちが入って「泣いている選手もいました(藤田主将)」。執念が実り、九回に4点を奪い11対10で勝ちました。西川監督は「選手の気迫がすごかった」と振り返り、高橋選手も「ここまでチームが一つになれたのは、キャプテンのおかげ」と認めます。

クラブ選手権の初戦の相手は所沢グリーンクラブ(埼玉)。藤田主将は「チャレンジャーとして向かっていきたい」と意気込んでいます。期待しましょう。

【和歌山支局長・福田隆】